

大阪大学における国際交流の推進

第4回 世界に開かれた魅力ある大学を目指して

大阪大学理事・副学長
国際交流室長

辻 毅 一 郎

1 キャンパスの国際化

大阪大学は「世界に開かれた魅力ある大学」となることを目指しています。世界各国から魅力ある大学として認められるには、まず何といても最先端の優れた教育・研究を行い、その成果を強力に発信して行かなければなりません。それらの成果は世界各地の研究者、学生の関心を呼ぶこととなり、その結果、本学を訪れ、本学に滞在する人々の数が増え、そのことが、なお一層レベルの高い教育・研究をもたらすことにつながります。

しかしながら、現在、大阪大学（に限らず日本の大学）が抱えている問題は、多くの留学生・研究者を受け入れる環境が果たして十分整備されているか、ということです。留学生・研究者の受入に付随するさまざまな業務が、ともすれば教員の負担を増やすことにもなりますし、また留学生・研究者にとって何かと不都合である場合がそこそこにあるように思います。とくに外国人研究者について、キャンパス内でも日本語以外は通用しにくいこと、宿舎が見つけないこと、意思決定システムが理解されにくいことなどのほか、子女の教育さらには就職の機会が十分ではないことなどの問題があり、実際、これらの問題が、外国人研究者の雇用を困難にしているという面があるのを否めません。「世界に開かれた魅力ある大学」にふさわしい「国際化された大学」を目指すため、国際交流の推進とともに、本学自体の国際化、さらには本学を取り囲む地域自体の国際化も図って行かなければならないことは明らかです。

2 サポートオフィスの設置

大阪大学は2007年10月にサポートオフィス(Office for International Students and Scholars)を設置しま

した。そのオフィスの主たる機能は、ビザの申請に関する業務を一元的に処理すること、本学が管理する宿舎の予約を一元的に行うことの2つですが、そのほか、外国からの留学生・研究者が大学に到着した時点で必要となる一連の手続きに関するいわゆるアライバルサービス、生活・就学情報の提供、さらには教職員への国際交流関連各種情報の提供等を行うことが期待されています。当面は試行ということでサービスを開始しましたが、すでに1年以上を経過し、その活動も本格的になってきています。連載第2回目で紹介した短期の留学生受入れプログラムFrontierLab@OsakaUにおいては、本サポートオフィスが在留資格認定証明書交付申請、宿舎の斡旋、到着時のサービス等を行い、これまでこうした留学生受入れプログラムを企画する、いわゆる受け入れ現場の教職員にかかっていた負担が大幅に軽減されたと考えられます。

このサポートオフィスは、ワンストップ・サービスという名目でこれまで数年以上にわたり検討してきたものですが、「世界トップレベル研究拠点」へ「免疫学フロンティア研究センター」の申請が行なわれたのをきっかけに急激にその必要性が認識され、設置が認められました。すでにご承知のように同申請は採択されましたので、今後、国際化をミッションの一つとする、この新しい研究センターのニーズにも対応して、このオフィスの機能を順次高めて行きたいと考えています。サポートオフィスの設置により、本学の外国人研究者・留学生受入れに関するサービス体制は大幅に改善され、外国有名大学と肩を並べられるようになることを期待しています。

3 宿舎確保のための基本的考え方

海外ではキャンパス内に多くの宿泊施設を持つ大学

も多く、例えばシンガポール国立大学では、3,000 室以上の留学生用専用宿舎を持っています。本学では、宿泊施設は旧大阪外国語大学との統合により数が大幅に増加しましたが、現在合計 400 室程度です。今後留学生をより多く受入れる方向であることを考えると、宿舎整備へのニーズは高く、文部科学省への要求も考えられますが、現在の情勢では実現は困難であろうと思われます。

宿舎に関する大きな問題の一つには室料の設定があります。もちろん、留学生に対して高い室料を課すことは好ましくありませんが、一方では国立大学が法人化され、法人の経営という観点からみれば、民間資金を導入するいわゆる PFI で建設するにしても、低い室料での宿舎の提供は難しいと言わざるをえません。宿泊施設の借り上げということも考えて行かねばなりませんが、借り上げの財源の確保が大きな問題となります。

一方、キャンパス内ということではなく、周辺の住宅地に目を向ければ、学生に賃貸可能な部屋はかなり大量に存在します。自宅通学でない日本人の一般学生は、生協や近隣の不動産業者などを通じて住居を見つけています。留学生も、やはりいろいろなつてを通じて住居を見つけているようですが、外国から来る人々にとって容易なことではないでしょう。そこで、利用可能な空き部屋に関する適切な情報を、留学生・外国人研究者等へ提供する、ということが極めて重要であることが分かります。本学では、国際交流室の下に外国人留学生・研究者の受入サービス検討ワーキングを設け、大阪大学生協の協力も得ながら、信頼性の高い住宅情報提供システムを確立してゆくための検討を進めています。

4 Global Campus Net (GCN) Osaka

GCN-Osaka (<http://www.gcn-osaka.jp/>) は外国人研究者・留学生のためのオンライン・コミュニティサイトです。以前、本学工学研究科の留学生相談室講師であった芦沢真五氏（現在慶応義塾大学ニューヨーク校事務長）により企画されたもので、2004 年に稼働しました。このサイトでは、外国人研究者・留学生が滞在中に必要と思われるさまざまな情報、すなわち保健・医療、生活、奨学金、日本語自習教材、子育て、物品リサイクル、VISA、住宅などに関する情報を提供しています。例えば Steps to take after the

accident / 交通事故発生後の処理、Preparing for Disasters / 災害に備える、What's a Disaster Emergency Dengon Dial 171? / 災害用伝言ダイヤルとは、Emergency Kit / 非常品持ち出し、Preparing for Earthquakes & Typhoons / 地震・台風に備える、といった具体的項目を挙げ、適切な情報を提供しています。日本語自習教材では、漢字などが自習できます。

GCN-Osaka は、留学生センターの担当教員の下に設置された GCN-Osaka 運営機構により運営されており、キャンパス環境の国際化に貢献すること、さらには大阪大学周辺に居住する外国人の方にも利用可能なサイトとなることをめざしています。大きな特徴として、単に情報提供にとどまらず、メンバー登録を行えば、メンバー同士が電子掲示板（BBS）を使って情報交換することを可能としている点が挙げられます。この掲示板は多言語にも対応していますので、例えば来日したばかりの留学生の家族が母語で医療や子育てに関する質問を投稿し、先輩留学生が答えるなど、母語での情報交換もできるようになっています。平成 21 年 1 月からは、希望する広さや家賃を入力して住宅情報をリクエストできる機能も新たに導入されました。国際交流室は GCN-Osaka をサポートオフィス機能を補完する重要な事業として、今後もこれを推進していきたいと考えています。

5 教職員の意識変革

大阪大学は大きな組織であり、本部国際交流室が部局で行われている国際交流・国際化の推進に関する活動をすべて把握するには、相当の努力が必要です。また、国際交流室が全学レベルで進めている施策等が、部局構成員に十分伝達されていないのではないかとという懸念もあります。そこで国際交流室は、大学構成員と本部との情報交換がスムーズに行われるようにすることを目的に、国際企画推進本部等を通して部局情報交換会やまた教職員研修会を開催しています。2 年前に実施した部局情報交換会では、11 の部局に本部から出向いて情報交換を行いました。結果として、学内での国際関連人的ネットワークが形成され、その後の短期受入れ・派遣プログラム、EU との学生相互交換プログラム等の企画・実施等に貢献しています。

一般に部局構成員は、とくに関心の高い教職員を除いて、国際交流に関する世界情勢や、受入れに関する規程等に関する知識を十分に持っているわけではな

く、留学生の受入れを行う段階に至って初めてその必要性が生じることになります。そのため受入れについて手探りの状態から始めるといった非効率性が発生することが多いと考えられます。今後、研修会等の開催頻度を上げるとともに、必要性が生じたとき、それに応え、適切な情報を速やかに提供できるような仕組みが必要であると考えています。

次にコミュニケーション・ツールとしての英語の問題に触れます。外国人研究者・留学生が日本に来ることを考えるときの障壁の一つが英語の通用性です。日本の大学に来るのであるから日本語が必須という考えも理解できますが、英語はすでにコミュニケーションツールとして確固たる地位を確保していると考えられます。外国からの研究者・留学生は、その母語のいかんによらず、英語でならコミュニケーションがとれる場合が多いといえます。教育プログラムを英語で提供することは、優秀な人材を集めやすい環境を創出することにもつながります。また、事務書類の一部も必要に応じて英語対応可能にしていくべきでしょう。英語はツールであると割り切って、少なくとも大学キャンパス内では英語でのコミュニケーションが可能という状況を早く創り出したいものです。国際交流室では、英語授業に関するFD活動、英語のみで学位取得可能なコースの開発、学生・教職員の英語駆使能力向上策の立案などを推進したいと考えています。

6 地域の国際化

最近よく指摘されるようになったことの一つは、大学キャンパス内だけでなく、大学周辺の地域も国際化し外国人研究者・留学生が快適に日々を過ごせる環境を整える必要があるということです。言うに及ばず、これまでも地域との連携は、ホストファミリーの紹介や交流行事等でも行われてきました。しかし、初めに触れたようにもっと根本的なこと、例えば、子女の教育、さらには配偶者の就業機会といった問題について、状況が改善されるよう努力して欲しいという要請が高まっています。これらのことについては、こうした問題に真摯に取り組んでいるNPOや、近隣の自治体と意見・情報交換を行い、改善を試みてゆきたいと考えています。

7 おわりに

本稿で4回にわたる連載を終えます。つたない記述で恐縮ですが、著者にとっては、本学の国際交流推進について日ごろ考えていることをとりまとめ、今後に生かす大変良い機会となりました。編集委員会に感謝の意を表します。

(電気 昭和41年卒 43年修士)



化学英語 101

リスニングとスピーキングで効率的に学ぶ

CD
付

国安 均 (大阪大学大学院工学研究科准教授) 著

J・M・ストライカー (アルバータ大学教授) 英語監修

化学に携わる人のための必修英語講座

- ◆ぜひ身につけておきたい化学英語を厳選
- ◆音声CD付きで化合物や反応名の読み方がわかる
- ◆教科書や大学院入試問題の英文で実践的に学べる (発行 化学同人)